

聖書:エレミヤ書24章1～10節

説教:彼らをこの地に帰らせ、建て直す

はじめに

日本は横並びが大好きな文化です。自分よりも優れている者がいればねたみから足を引っ張ろうとするし、反対に自分よりも劣っていると思う者がいると、ねじれたコンプレックスが働いて徹底的にいじめます。ですから、そんなことにならないようにと皆がんばる。ところが人生にはまさかということがあって、借りていたお金を返せなくなったり、人を傷つけてしまったり、そんなことで信用を失ってしまうことがある。一度信用を失ってしまうと、名前がブラックリストに載ってやり直しが非常に難しく二度と這い上がるができない。それがこの社会の姿です。

聖書はどうでしょうか。異教の神々を拝み、罪を繰り返していた南王国ユダの人々に対して、預言者エレミヤは「主に立ち返れ」と叫び続けました。しかし人々は聞く耳を持たず、かえってエレミヤを迫害し、ますます罪を重ね、とうとうバビロンの軍隊に攻められて、補囚となって外国に連れ去られていきます。今なら「自己責任」「自業自得」と言われておしまいでしょう。神はどうされたのでしょうか。結論から言えば、神は「自己責任」とは言わず、今の時代の感覚からしたら意外なことをお語りになった。それはなんであったか、ともに見てまいります。

1 ユダの王と民

1) 第19代 エコンヤ

今日の箇所には、エコンヤとゼデキヤという二人の王さまの名前が出て来ます。一体彼らは何者なのか、少し整理しておきましょう、まず1節にあるエコンヤから。この人はユダ王国の第19代目の王さまで、第二列王記24章を開くと、彼が何をしたかが書かれています。バビロンの軍隊がエルサレムを囲み、エコンヤ（エホヤキン）を降伏させ、主だった人たちを捕虜にしてバビロンに補囚として連れて行った。これが起きたのがBC.597年だと言えます。これがエコンヤに関わる出来事でした。

2) 第20代 ゼデキヤ

続いて8節に出てくるゼデキヤを見ます。エコンヤが補囚となって連れて行かれた後、ゼデキヤが20代目の王となります。とは言え、実際はバビロンの植民地ですから常にバビロンの圧力がかかっ

ているので勝手なことはできない。地方の市長とか町長もバビロンが指名した者でないと成れない。そうなれば住民の間にどんどん不満が高まるわけで、あるとき暗殺事件が起きてしまう。バビロンの報復を恐れた人々がエジプトに逃れようとする。そのときエレミヤは、「エジプトに逃れてはいけません。ここにとどまれば必ず救われる」と預言するのですが、人々は逆切れしてエレミヤを無理矢理エジプトに連れて行ってしまいます。

これが今日の箇所の背景です。それでは細かく見ていきましょう。

2 恵みとのろい

1) 良いいちじく

以前にも、主がエレミヤにアーモンドの枝や煮え立った釜を見せながら、みことばを語ったことがありましたが、ここもそうです。良いいちじくと悪いいちじくを見せながら主は説明していきます。まず良いいちじくについて、5節から7節。「スラエルの神、主はこう言う。わたしは、この場所からカルデア人の地に送ったユダの捕囚の民を、この良いいちじくのように、良いものであると見なそう。わたしは、彼らを幸せにしようと彼らに目をかける。彼らをこの地に帰らせ、建て直して、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。」

さきほど、第19代目の王エコンヤの時代、主だった人たちがバビロンに補囚となって連れて行かれたと言いました。主は、その人たちを良いいちじくであって、彼らをユダの地に帰らせると言われるのです。「帰らせて、立て直し、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。」簡単に言えば、もういちどやり直しましょうと言ってくださった。

どう思われるでしょうか。バビロンに連れて行かれたのは、どんな人たちだったのですか。主を信じる忠実な信仰者だったのか。そうではない。むしろ、エレミヤの忠告に耳を貸さずに、かえってエレミヤを迫害し、ひたすらに自分たちが好ましいと思えたほかの神々を拝んでいた人たちです。その結果、バビロンに連れて行かれてしまった。とこ

ろがそんな人たちが自分の国に帰ることができ、建て直されいいくというのです。これはどういうことでしょう。

この社会は、自分のした悪いことについては、まるで水に流したかのようにしてなかったことにするのが得意です。すぐに忘れてしまう。ところが他人のした悪いことについては、そうではない。いつまでも覚えていて、赦そうとしない。そういう社会です。それから見ると、ここで主が言われていることはあまりにも私たちの常識を越えています。私は最初ここを読んだとき、読み間違えたかとさえ思うほど戸惑ったことを覚えています。

2) 悪いいちじく

そのことは一旦わきに置いて、続けて悪いいちじくについて見ていきましょう。8節から10節。「しかし、悪くて食べられないあの悪いいちじくのように——まことに主は言われる——わたしはユダの王ゼデキヤと、その高官たち、エルサレムの残りの者と、この地に残されている者、およびエジプトの地に住んでいる者を、このようにする。わたしは彼らを、地のすべての王国にとって、おのきのもと、悪しきものとする。また、わたしが追い散らす、すべての場所で、そしりと嘲りの的、物笑いの種、ののしりの的とする。わたしは彼らのうちに、剣と飢饉と疫病を送り、彼らとその先祖に与えた地から彼らを滅ぼし尽くす。」

悪いいちじくと呼ばれているのは、ユダの最後の王であるゼデキヤとエルサレムに残っている人たち、そして先ほど言ったエジプトに逃れた人たちです。彼らはみな、エレミヤの声を聞かず、エレミヤを迫害した人たちでした。主に逆らい、主の警告を無視したのですから、その罰を受けるのは当然でしょう。実際ゼデキヤは、バビロンの軍隊に捕まると目の前で息子たちが殺され、王宮が火で焼かれ、神殿は崩壊し、自分自身も目をえぐられ、足かせをはめられてバビロンに連れて行かれます。主のみことばの通りになっていく。

主の、良いいちじくに対する赦し方にも驚かされましたが、悪いいちじくに対する主の徹底した厳しい態度にも驚かされます。もう少し穏やかな方法はなかったのか、そんなことさえ思ってしまう。

3) 二つのいちじくの違い

良いいちじくと言われたエコンヤは徹底的に赦され、悪いいちじくと言われたゼデキヤは徹底的

に厳しいさばきを受ける。この違いはどこから出てくるのか。そこを知りたくなります

おそらくみなさんの予想はこうでしょう。エコンヤが良い王さまで、ずっと主への信仰を保ち続け、いつも主を信じていた、エレミヤの語ることばにも耳を傾けていた。そのようなエコンヤの忠実な信仰のゆえに、バビロンではつらい思いはしたけれど、きちんと元の国に戻ることができて建て直してくれたのだろう。一方、ゼデキヤは悪い王さまで、最初から最後まで主を信じないで、異教の神々を拝み、エレミヤを迫害し、エレミヤが語ることばに耳も貸さなかった。それでさばきを受けたのだ。

実際はどうだったのか。ゼデキヤに関してはその通りです。彼は主に逆らっていた。ではエコンヤはどうか。彼は信仰者だったのか。いいえ、違います。36章に出てきますが、エコンヤは、エレミヤが書いた主のことばの巻物を引き裂いて火で焼いたくらいの人です。とうてい信仰をもっていたとは言えない。つまり、エコンヤもゼデキヤもどちらも負けず劣らず、信仰をもっていない。それなのに、エコンヤは赦され、ゼデキヤは厳しいさばきを受けなければならなかった。いったいどうしてか。その理由を知りたくなります。

3 十字架

1) 思い直す神

鍵となることばが18章7, 8節にあります。「わたしが、一つの国、一つの王国について、引き抜き、打ち倒し、滅ぼすと言ったそのとき、もし、わたしがわざわいを予告したその民が立ち返るなら、わたしは下そうと思っていたわざわいを思い直す。」

同じ表現が24章7節後半にもあります。「彼らが心のすべてをもつてわたしに立ち返るからである。」もし彼らが悔い改めて立ち返るなら、わざわいを思い直して、今度は恵みに変えてくださる。それが主なのだということです。ということは、エコンヤとゼデキヤ、このふたりはどちらも主に逆らっていたけれど、エコンヤはバビロンに連れて行かれた後で主に立ち返った、それで赦されたということになる。しかしゼデキヤは立ち返らなかった、それでさばきを受けることになった。それが二人の大きな違い。

では、エコンヤが悔い改めたということが聖書のどこかに書いてあるのか。直接には書いていない。しかし、エレミヤ書の次に置かれている哀歌には、バビロンに補囚となった人たちの嘆きが書

いてある。こんな嘆きです。「主は正しい方である。」「このような苦しみにあっているのは、私が逆らい続けたからだ。」そんなふうに告白して、主に立ち返ってく姿が記されている。主はそんな彼らの告白を聞かれ、思い直されたのです。

2) さばきから救いへ

イスラエルの人々は、主のさばきを叫ぶエレミヤのことばを苦々しく思っていました。これは他人事ではない。私たちも同じかもしれない。厳しいことばは聞きたくありません。それより、「あなたはそのままがいいのです。大丈夫です」そっちのほうがよく聞こえる。罪を見なくて良い、立ち返らなくて良い。それが私たちを幸せにつながるのか。もしそうならそうすればよい。しかし、実はそうではない。そのままにいるならあなたがたは滅びに向かう。だからあなたがたは、自分がしてきたことに向き合いなさい。いったいあなたは何をしてきたのか。もしも、「私は主に逆らい続けてきました」と告白するなら、主は思い直される。

罪をさばきながら、しかし思い直し、さばきを赦しに変えてくださる主。私たちはそのような主のお姿をどこで見られるのでしょうか。十字架です。十字架こそ、罪を裁きの場所。それと同時に罪を悔いる者には思い直されて赦しを与える場所でもある。

エコンヤは実際、自分の国には戻ることはありませんでしたが、後にバビロンの王のあわれみを受け、バビロンの王たちの中で最も高い位を与えられて名誉が回復されていったと言われます。主のみことばの確かさに感謝します。